

## 審査概要

本論文は、400字詰め用紙254枚（101,600字）で規定の字数をクリアしている。論題は「真宗における救済—王舎城の悲劇を通して—」となっているが、臨床的な立場から死の苦しみをどう超えていけばいいかを宗教、特に真宗の救済論にたずねたものである。

論者は、もともと博士前期課程まで、大阪大学で老年学を研究しており、その後、本学の博士後期課程に入学し、真宗学を専攻して、老・病・死をいかに超えるかを研究してきた。本学を満期退学した後、研究生となり、現在は熊本の私立短大で助教として研究を続けている。

臨床の場で死をどう超えるかは、高齢者やがんの患者が多い昨今、国民的課題であり、それに、宗教の立場で応えていくのは極めて重要である。本論文は、そのような方向を目指したものであり、宗教の普遍化の観点からもその着眼を評価したい。

さて、序章では、論文製作の目的として、「真宗における生死の問題や苦悩の超越に関する一視座を示すこと」と述べており、表現に明確さを欠くが、ようするに、真宗における生死の苦を超える宗教的救済を目的としている。先行研究に、アルフォンス・デーケン、信楽峻麿、田代俊孝、鍋島直樹らの論考を取り上げ確認している。

第一章では、『観無量寿経』における「韋提希の救い」を取り上げ、金子大栄、田代俊孝の解釈を軸に、その理論を紹介して論を進める。しかし、両者の解釈は、善導の『観経疏』によっているものであり、論者も直接、『観経疏』の原文によるべきであり、それがなされていないのは、研究が浅薄であるとの謗りを免れない。次に、本論文51頁に「第二項去此不遠に通じる」、55頁にも「第二項去此不遠や第四項阿弥陀仏空中住立にも通じる」など再々「通じる」ということばがあり、表現の曖昧さを感じる。また、親縁、近縁、増上縁の三縁の解釈があるが、法然、親鸞の解釈が書かれて折らず、自力の三縁釈が肯定されて終わっている。また、親鸞の「来迎」の解釈も、自力的解釈、無他力的解釈を対比させ、明確に違いを示して論を展開すべきである。

第二章は、『教行信証』「信巻」所説の『涅槃経』の解釈を中心に「阿闍世の救い」について述べられる。概ね先行研究に基づいてオーソドックスに論を展開している。

しかし、『教行信証』所説の『涅槃経』文から、六師外道から月愛三昧を述べているが、『涅槃経』本文に当たり、親鸞がどう理解したかを考察すべきである。岡亮二や鍋島直樹の解釈から、阿闍世の罪の執着の開放を業道自然にもとめているが、業道自然が何による概念で、どういう意味を持かも述べられていない。

また、「唯除」の解釈も唐突であり、「抑止と摂取の二義をもつ」というが、その説明は不十分である。さらに、「信心仏性」も、一般的な仏性解釈に対して、親鸞がどうして「信心仏性」説を展開したかも、なんら説明されておらず、『宝性論』の引用の意味も理解できない。阿闍世の救済論はセオリーどおりに論じているのはいいが、すべて、結論的で展開の不十分さや独創性のなさが目立つ。

その中で、先学の領解に導かれながら、親鸞自身の読み替え（たとえば、第一章第二節第六項「三心」65頁から、第二章題二節第一項「難治の機」121頁から、など）にも着目して、親鸞が徹底して罪悪深重たる凡夫の自己に立脚したこと、そして、そのようなわが身であっても、仏・菩薩の法によって救済されると明示した親鸞の独創的領解について論及している点は、親鸞思想を学ぶ者の姿勢として評価できる。

第三章は、「真宗における浄土観」と題されているが、内容的には、真宗における救済のあり方がのべられており、章題とに違和感を感じる。特に「転」や「即」の問題を第四項、第五項で述べるが、この問題は、親鸞の救済論の核心である。着眼はいいが、展開が不十分で、結論的である。それも、先行論文の受け売りのような表現がみられる。「真仏土巻」を中心とした光寿無量、「化身土巻」の報化二土論などの詳細な展開があれば、本論がもっと重厚なものとなったと思われる。

結章では、全体を概観して、宗教的救済の必要性を述べ、自身を含めた主体的な学びの重要性を主張する。そして、今後の展望として、デス・エデュケーションやビハラーなどによる真宗の教化と実践が望まれると結んでいる。

ともあれ、多くの問題点を指摘したが、それは、論者のいっそうの成長を願ってのものである。本論文自体は、「真宗における救済」を、課題の中心にすえ、論者自身の宗教的欲求に誠実かつ真摯に応答した論考であると評価できる。

老年学を研究し、その視点から真宗の宗教的救済を研究するには、方法論や価値観に違いがあり、多くの苦労や戸惑いがあったと思われる。しかし、それにもめげず、果敢に仏教学関係の学会でも、発表参加し、努力してきたことは、大いに評価したい。また、本論文も展開に若干の甘さが見られるが、着眼と努力は全員一致して認めるところであった。真宗学の学界からしても今後このような研究が、広くなされることが望まれる。その先駆性も了としたい。評価としては、「可」とし、博士の学位に相当するものとする。